

会議名	令和4年度	開催日	令和5年2月8日(水)
	第2回台東区立図書館に関する意見交換会	時間	午後7時～8時50分
		場所	生涯学習センター504教育研修室
出席者	<p>大串夏身委員長(昭和女子大学名誉教授) 野末俊比古副委員長(青山学院大学教授) 田島大輔委員(公募区民) 森真奈委員(公募区民) 福沢俊之委員(台東区立御徒町台東中学校校長) 佐藤有理子委員(台東区立松が谷保育園園長) 永田晴久委員(台東区社会教育団体協議会理事長、台東区写真連盟理事長) 梶靖彦委員(台東区教育委員会事務局次長)</p>		
配布資料	<p>配布資料 資料1「中央図書館における機能強化検討の方向性について」【事前配付】 資料2「相談(レファレンス)・案内について」【事前配付】 資料3「こどもとしょしつについて」【事前配付】 資料4「中学生・高校生への図書館サービスについて」【事前配付】 資料5「第2回意見交換会での検討事項について」 参考資料「年代別の図書館利用イメージ」【事前配付】 「広報たいとう1/20号」</p>		
内容	<p>1. 開会 配布資料の確認 2. 挨拶 大串夏身委員長 3. 議事 (1)報告事項 池波正太郎生誕100年記念事業について ○参考資料「広報たいとう1/20号」について、事務局から説明。 (2)審議事項 中央図書館における機能強化について ・相談(レファレンス)・案内について ○資料1・2・5について、事務局から説明 【委員長】 事前に意見をいただいた委員からもご発言いただきたい。 【委員】 今後の図書館のコンセプトに当たると思うが、静かに勉強や読書をするというのがいいのか、地域のコミュニティの場所として、明るくコミュニケーションをとりやすい場所にするといいのか、そこが重要な考えるポイントかと思う。 なるべく利用してもらい、来ていただく、そういうコミュニケーションの場にするならば、明るく楽しくというようなところから考え、元気にコミュニケーションを取れる場にしてもいいのではないかと思う。 レファレンスサービスは正直知らず、ホームページなどを見て、いろいろあるということがわかった。 何ができるのかわからないので、もう一度それを意識し図書館を眺めたが、レファレンスサービスがあるということは書いてあるが、何ができるといことは書いていない。 データベースもあって書いてあるが、どんなデータベースがあるかはわからない。 具体的なサービスの内容をポスターやチラシなど、目に見えるところに置くといいのではないか。</p>		

また、見える化については、必ずしもポスターなどではなく、デジタルサイネージなどの技術を使用し、省力化に繋がればよいと思う。

レファレンスサービスに求められるものとして、相談したいときにいつでも相談できるということで、件数が少なければ職員が答え、多くなる場合は、AIチャットボットで答えるということも可能かと思う。

育成のところは、一般論で、必要なスキルが明確ならOGTをやればよい。

【委員】

カウンターの印象として、なかなか声をかけづらいと感じている。

忙しそうに仕事をしているということ、また、総合と案内となっているが、来館者目線だと違いがわからない。

特に総合に大きくインフォメーションマークがあるので、何かを尋ねようとしたときに足が向かうのは総合カウンターだと思う。

意図しているコンシェルジュ的な活用を1階案内カウンターであるのであれば、空港の案内のようにわかりやすく「コンシェルジュはこちら」「予約はこちら」というふうに問い合わせ内容を掲示すれば、利用者もそれに沿っていくと思う。

利用者がどちらに行けばいいのかという情報を明らかにするという意味合いで、資料5に、館内の動線や情報整理により、カウンターでの案内時間が短縮され、他の業務に時間があてられるのではないかと考え提案した。

続いて、レファレンスサービスについては、一番課題となるところは、一般的な認知度が低いということだと思う。

これは全国の図書館でも同様の課題があると思うので、どんな意見が全国的にあるのか、こういう会議の場話があるといいと思う。

まずはレファレンスサービスがあるということの見える化。

どこに情報があるかパッと思い出せないというのが本音で、場所の工夫が必要だと思う。

もう一つ、興味を持ってもらうということで、「あやふや文庫」という企画を共有したい。

レファレンスサービスがどういうものを、主に子供たちや若い方に興味を持ってもらい、そこから利用者を増やすことに繋がるのではないかと。

あやふや文庫は、「タイトルが思い出せない、本の一部しか覚えていない、あやふやな本はありませんか？」というコンセプトで、ツイッターで「こんな本を探してください。」という情報を集め、返信してあげるという活動をさせている。

また、実際にその内容を書店で展開したのがある。書店のお客様が、あやふや文庫の企画に沿い、わからない本などを投稿し、それを書店が見つけ回答する。

レファレンスサービスがどういうものか、実際に利用した方がどんなことを聞き、どんなふうに見つけたのかということ、子供たちが探している本などの情報をまとめやすいものを中心に展開するのが、真似しやすいのではないかと。

【委員長】

ただ今の説明・意見について、質問はあるか。

【委員長】

図書館でも利用者からいろいろ聞かれるが、利用者もあやふやなところで聞いてくることもある。

児童書のストーリーをキーワードで検索できるデータベースを作成しているところもあるが、誰でも使えるわけではないので、オープンにされるといいのではないかと。

疑問に感じながら、どこに聞いたらいいのかわからないということもあるので、あやふや文庫のような企画をいろいろやっていただくといい。

個人的な質問や疑問を図書館員に聞いていいのか、また、小さな頃から図書館に通っているが、そのようなサービスがあると知らなかったという話もある。

実際にその図書館に行くと、カウンターが奥にあり、入口近くに相談できる場所がない、場所がわかりにくいということがある。

23区で一番レファレンスで有名なところは、大田区立の図書館で、入口の近くにカウンターがあり、貸出カウンターの隣に相談カウンターがある。その前のオープンスペースにレファレンスブックが置いてあり、その周りに座って調べることもできる。戦後の東京のレファレンスで一番すばらしい成果を上げた所で、区民アンケートでも、図書館員に相談して話を聞きたいというのが2割か3割だったと思う。特に多かったのは自営業の方や、働いてる方々だったと思う。

アメリカの東海岸の図書館は、ほとんどこのスタイルである。

日本の図書館では、どこに聞けばいいかが、すぐに分からないところが多い。

貸出返却カウンターで忙しそうにされているとなかなか聞けない。

また、明るくという話があったが、図書館はあまり明るくない。やはり静かにと言うからか。
ある図書館で聞いたが、開館した時はそんな制限はなかったが、徐々に話さないでとか、いろいろな制限が加わると、だんだん図書館員が暗くなり、住民も暗くなり、暗くなると貸出冊数も落ち、図書館員に声がかかる数も少なくなるということがあった。
やはり明るく楽しいというのは必要である。

【副委員長】

図書館不安という概念があり、図書館に来た時の、図書館員のしかめっ面や最初の対応など、第一印象みたいなものが次の利用にとっても影響を与えるという説がある。物理的にも雰囲気的にも明るいというのは、とても大事だと思う。

ただ、静かにした方がいいということもある。そこで、図書館が一律静かにとか、一律明るくということは決してなく、ゾーニングの問題で、このあたりは明るくにぎやかなところ、この辺りは静かに本を読むところという図書館が増えている。エリアを厳密には分けず、あの辺りは静か、この辺りはにぎやかというふうにすることもできる。

ただ、実際問題として東京の地域館などは小さいところが多いので、時間のゾーニングをすることが考えられる。この時間帯はにぎやか、この時間帯は静か、この曜日は子供が多いからわりとワイワイしている、場合によっては夜になったらピアノが流れるとか、音が出るとか。あらかじめアナウンスしてあれば時間でもゾーニングができるので、それは工夫次第かと思う。最初は苦情が来るらしいが、それも最初だけで、そういうものだと思って使い始めると、その方がいろいろな人が来るようだ。

明るく楽しいというのは、とても重要な意見ではないかと思う。新しくできる図書館は、喋っては駄目というところの方が少ない。逆に喋る方がデフォルトになってきている。場合によっては飲食もOKな公共図書館が増えている。ポリシーの問題である。全面的にはではなく、部分的にでもゾーンや時間を分けて、多様な使い方をできるように認めてあげることが大事かと思う。

二点目は、「こんなことを聞いていいのか」と、今の若者世代、いわゆるZ世代は、遠慮する。授業でも手を挙げない、でも「質問ある？」と言ったら、ある。なぜかと言うと、みんなの時間を奪ってはいけないとか、こんなこと聞いてはいけないのではないかと、遠慮している。なので、あやふやな文庫の企画は素晴らしい。こういう聞き方をしてもいい、あやふやなことを聞いても大丈夫と思える。

また、具体例を出すというの、ネットではわからないことを聞けるのだということがあればとてもいいと思う。図書館にも利用者の声などがあると思うが、あれのレファレンス版。こういう質問があってこう答えた、ということが、具体的にわかるような形で見せてあげるといいと思う。

若者はツイッターを検索に使う。なので、若い人にアピールするのであれば、ツイッターで事例を定期的に流してあげると、効果があると思う。

もう一つ、チャットで回答するのはどうかという意見ことがある。また、実際にウェブでレファレンスを始めたところがあるが、海外の特に大学図書館などでは、対面はもちろん、メール・電話・ファックス・チャット・SNSなど、あらゆる手段で受付けている。そんなことをやると殺到して困るのではないかとと思われるが、そんなことは起きない。むしろ今まで聞けなかった人が聞けることのメリットの方がはるかに大きいし、文字でのやりとりができるようになるので、チャットなどはとても意味がある。

本学の図書館でも、コロナの時に来館できないので、レファレンスをネットで行った。これにはメリットがあり、対面だと混み合うこともあるが、チャットの場合、あとでまとめてゆっくり答えることができるので、お互いに時間の効率がよくなる。なので、うまくやっていけば、決して悪いことではないと思う。レファレンスは、いろいろなツールを使ってチャンネルを増やすことが重要かと思う。

また、どこで何を聞いていいか、ということは、今でもあるが、昔はよくたらいまわしと言われていた。そのため、ワンストップサービスが大事、内側の人が動いてくれるのが大事だと言われていた。今はもう一歩先、ワンストップサービスではなく、どこでもサービス、つまり誰に聞いてもすぐに答えられる。その上で、もう少し突っ込んだ質問が来たときは、改めて予約を取ってくださいなど、クイックなものとして少し専門的に時間かかるものを仕分け、どこでもサービスを展開していく。

海外だと、複数の図書館が連携している例があり、図書館にある受話器をとり、こういう質問をしたいという、当番館が答えてくれるというものもある。いつでも混み合う時間帯と、そうでない時間帯があるので、そこをうまく工夫していけば、いわゆるどこでもサービスのようなことはできると思う。今はオンラインでもできるわけで、少し規模の大きな図書館だとそういうことも考えていくことができると思う。

【委員長】

レファレンスというと、何か固くなってしまふ。

横文字を使うのは何となく堅苦しくなってしまう、もう少し日本語でわかりやすく表現できればいいと思う。

利用者には、すぐに聞きたいという人がいる。

そこで、量産店などでは、ポケットに辞書のようなものを持っていて、質問をすると案内してくれることがあるが、図書館ではあまりそういうところはない。

たまに区立の図書館でも、質問をすると、それをめくり、キーワードでどこの本棚にあるということがわかるようなものを作っているところがある。

また、葛飾区の図書館では、夏休みに子供たちからよく聞かれる自由研究などのテーマについて、リストを作って職員が持っていて、どこでもそれで答えるという試みを行っていたところがあった。

やはり、聞きたい人は誰でもどこでも聞くので、その時にある程度対応できるようにするシステムを作っておく必要があると思う。

また、自分で調べたいという人は一定程度おり、そういった人たちが自分で調べられるような仕組みを図書館の中に作るというのが必要である。

OPACで検索して、どこに行けばいいのかということから始まり、雑誌の調べ方や新聞の調べ方など。

また、オンラインデータベースも幾つもあるので、それぞれどういうデータベースで、こういうことを検索するとどういことがわかるかということ。

私がアメリカのボストンに学生の引率で行き、図書館を見てまわった時はオンラインデータベースやインターネットの情報源の冊子が置いてあり、それを見ながら自分でやるということができるようになっていた。

子供の部屋にもそういったものがあり、自分でどんどん調べて、最後にわからないときは、職員に聞く。

また、図書館員が忙しい時に効率的に案内できるようにすることを考える必要がある。

私が勤めていた頃は、館内の書架図があって、「この本はどこにありますか。」と聞かれたら、「ここにありますよ。」と、書架図に丸をつけて渡し、自分で調べてもらう。わからなければ、「また来てください。」というやり方をしていた。やはり、メモを渡すことが大切だと思う。例えば、請求番号007はこの棚に行けばいいと書架図に丸をつけて渡せば、そこに行ってもらえる。ところがメモがないと、歩いてうちに頭の中で007が700に変わってしまうこともある。求める本がないとトラブルになってしまうこともある。

できるだけ利用者が正確に自分の求めるところに行ってもらえるような仕組みを作る必要がある。

図書館の本には、レファレンスと言うと、専門職がやることなど、難しいことが書いてあるが、むしろ利用者の立場に立って、利用者がどういう行動をして探し出すのか、たどり着くのかということを考え、館内の動線など仕組みを作っていくといいと思う。

【委員】

レファレンスサービスをなぜ推進したいのかということがまず疑問としてある。

レファレンスサービスはとても有意義であり、それをすることによって、利用者が自分で調べられる力がつくとか、レファレンスサービスを止めてしまうと図書館員が育たないとかがあると思うが、今回どうして議題として「レファレンスサービスの促進」をテーマにあげているのかを知りたい。

目的に沿った形でまとめていくのがいいのではないかなと感じた。

【委員長】

レファレンスというのはレファレンスという概念があるわけではなく、最初の段階は要するに問い合わせ。

聞きたいことに答えるのがレファレンスの出発点である。

そのため誰が答えてもよく、何の資格もない職員が答えてもいい領域がある。

図書館員は、図書館員だからというわけではなく、は誰でも答えられるような教育を受けている。

利用者に、そこにある本をできるだけたくさん利用してもらい、求めるものがあれば見つけ出し、ある程度要求を満たして欲しい、というのが出発点である。

そういうことがたくさん積み重なり、社会全体として何かプラスの方向に明るいイメージが湧いてくれば、それは図書館として素晴らしいということになる。

ごく自然に本があって、それについて人間は疑問を持つから、それについて答える。

現場の図書館員が皆、ある程度答えられるようにしておくことはとても大切なこと。

【委員】

職員としての志の部分でも、なぜということは大変だが、職員の人数や作業時間が限られている中で、その問い合わせに近いものを増やしてコミュニケーションを活性化させるためのレファレンスの促進と、なかなかたどり着かないがすごく有用な本があるので、それにきちんと導く、利用率を上げていく、そこにフォーカスしていきたいということだと、やっていくアクションが違ふと感じたので意見を聞いてみたい。

【事務局】

レファレンスの利用促進について聞いた理由は、台東区で目指す図書館像があり、「区民の役に立つ図書館」と

「生涯学習を支える図書館」を目指しているからだ。

特に、図書館は「区民に役立つ図書館」というところがあまり区民に浸透しておらず、本で教養を深めたり、貸し出しをすることでというイメージが強い。

もし何か生活に困ったというとき、図書館で本を調べようとか、図書館員に聞いてみようとか、そんなアクションを区民の方が起こしてもらえれば、図書館はもっと役立つと思う。そのためには、「図書館は役立つ」ということを、小・中学生から学んでもらいたい。そうすると、大人になって本当に困ったときにも、もっと高度な複雑な課題も解決できるのではないかと思うので、レファレンスを促進させる方法を問わせていただいた。

・こどもとしょじつについて

○資料3・5について、事務局から説明

【委員長】

まず、学校・園関係の委員からご意見をいただきたい。

【委員】

こどもとしょじつを見て、とてもたくさん楽しそうな本があり、年齢によって書架の高さも違い工夫されているという気づきもあった。

子供たちが本を手にとった時にその場で見られるように床が確保されていたり、座れる低いベンチなど、危なくないものを置き、そこで眺めて楽しく過ごせるスペースがあるといいと思った。

どのように変えることができるかと思いながら見て回ったが、子供はある程度物理的に制限があった方が落ち着くことから、書架をコの字型にするなど、あらかじめ限られた、ここに座るんだという目印がしっかりある方が、ゆっくりと絵本を楽しめるのではないかと思った。

また、おはなしのへやがとても広く、こんなに広いところが奥にあったというのにびっくりした。

イベントもあり、動かないものを置くことは難しいと思うが、スーパーなどの子供ルームのように、ちょっと座れる空間、仕切りや座卓のようなテーブルがあってもいいと思った。

また、奥の窓辺の方でテーマに沿った特集をしており、面白そうなお話があつて見てみたいと思ったが、少し目立たないと感じた。

子供たちはいつも元気に走り回ったり騒いだりしたくなってしまうが、ゆっくり本が読める環境を整えつつ、奥の方は少しにぎやかにしていいというような、利用者も認識して利用できる場所になるといいと思った。

【委員長】

事前に意見をいただいた委員からもご発言いただきたい。

【委員】

ターゲットの範囲が広いので小さい赤ちゃんから6年生までとなると、それに合わせたエリアを分けるゾーニングなどの工夫をしていくのがいい。

学年毎で流行りの本などがあると思うので、子供が興味持つようなトピックのものを置いて、それを周知することで、来たら何か楽しいというような形にしていったらいいと思う。

また、小学生などは、1人で来るよりも友達と来る方がいいかなと個人的には思っており、コミュニケーションが取れる机とかエリアがあつたらいいと思う。

最後に、おはなしのへやは、部屋自体はとてもよかったという記憶があるが、ドア閉めると中が見えないということで、透明な壁や防音にすることも、リニューアルをするなら可能かなと思う。

【委員】

子供たちが好きなところに置けるような椅子で、使い終わったら簡単に片付けられるような、重ねて端に寄せられるようなものがある方が、物思いに本を読む時間が作れるのではないかと感じている。

それに加え、おはなしのへやが、小さい子と一緒にゆっくり本読むには少し居心地が悪いように感じている。

床も硬そうなので、簡単にもたれられるようなクッションなどがあればいいと感じた。

ただし、赤ちゃんばかりが使う場所ではないので、衛生面からあまりパブリックなものは置かない方がいいという意見もあると思うが、こうなつたらいいなという意見として述べた。

現在は、日本の作家の本と、外国の作家の本が、五十音順で並んでいたような気がするが、一部、ジャンル別に仕分けられていると、動物が好きだから動物のところ、果物のところとか、子供たちも1人で探したりできるようになるかと思う。

そういう普遍的なテーマで、絵本にたくさん共通するものがあると思うので、そのように分けられていると、親目線

でも次はどんな本を読んであげたいかなとかいうときに探しやすいと思う。

【委員長】

ただ今の説明・意見について、質問はあるか。

【副委員長】

委員の皆さんのご意見は本当にその通りで、やはりこういう利用者のご意見というのは、非常に重要だと思う。私からは、ここには別の観点で三つだけ。

一つは、こどもとしよしつは、どうしてもいわゆる読書のイメージになる。しかし、実際には勉強のための本、科学の読み物など、いろいろなジャンルの本がある。子供たちに、ここに行くところの本があるよと届いていない可能性がある。なので、いわゆる、読書感想文でこれを読めというようなものだけではなく、いろいろなものがあるんだよということ、なんなら勉強してもいいんだよ、勉強に役立つものもあるよ、ぐらいいいことが伝わるような、あるいは子供のための読書会や勉強会、大人でいうサイエンスカフェのようなものやってみるとか、そういう取り組みはあってもいいと思う。そういうところは、とても重要なおところだと思う。

二点目は、どうしても図書館側が、大人が子供に提供するというスタンスになってるが、発想を少し変える時期に来てるかと思う。先ほど、特集を組んでるとあったが、例えば子供たちとか、親子が、自分たちでも特集の棚を作ってみようとか、自分の好きな本を並べてみようなどとしてもいい。

どういふ本が読まれるかという、大人が勧めたものよりも友達とかみんなが読んでる本が読まれる。なので、〇〇小学校の〇〇ちゃんでもいいし、匿名でもいいが、みんなはこんな本を読んでいるんだ、この子はこんな面白い本を読んでいるということ、子供たちが作っていくなどとしてもいい。

または、棚を作るのはなかなか整理が大変になるというのであれば、ポップをつけるとか、帯をつけるとか、紙を挟むでもいい。利用者のみんなが、この本面白かった、これ読んで勉強になった、そういうメッセージがついていると、途端にそれを読む。ぜひ、みんなが、みんなで棚を作るという、そういうことがあるといいのではないかと思う。三つ目が、居場所として、どうしたらみんなが来るだろう、過ごしやすくなるだろうということ言えば、こどもとしよしつでは飾り付けなどいろいろするが、そういうのも、利用者がやってもいい。小学校単位でも幼稚園単位でも、夏休みに親子を募集してもいいし、飾り付けをしたり、子供たちが書いた絵を壁に貼ったり、安全性だけは気をつけて、図書館自体を利用者が作っていくような仕組みというのがいいと思う。

極端な話だと、組み替えができる木の棚で書架になるものに子供たちがペンキを塗り、絵を描いて作ったりなど、今は、道具も仕組みもアイデアもある。これは大学だと学生協働と言って、学生が運営に関わる、学生目線でいくというもので、かなり広がっている時なので、公共図書館でも、いろいろな学校・地域・子供会など協力しやすいので、そんなことも考えていくといいのかなと思う。

・中学生・高校生への図書館サービスについて

〇資料4・5について、事務局から説明

【委員長】

まず、学校・園関係の委員からご意見をいただきたい。

【委員】

これまでの説明を聞いて、こんなにも一生懸命考えてくれていることにびっくりしている。

子供たちに周知していかなければいけないというのはすごく感じた。

グループ学習席については、コロナの関係でグループ学習を全然やらないできている。

校長会関係でアンケートを取っているが、グループ学習は全国的にもしてないというのが今日の流れになっている。そんな中で、現場では、これから少しずつ元に戻していこうという意見があるが、このタイミングでどうなのかというのがある。

また、学級の中でグループワークを行うときは、一定程度目的があったり課題があったりする。グループの組み方も意図的に組んだり、仕掛けをしたりというのがある。図書館でのグループ学習というものがパッとイメージが沸かない。

ただ、放課後の自習や何かをさせるときに、教え合い、わからない時には周りの子を覗いて書いたりなど、そういう相互作用は、グループにすると起こりうる。図書館の中で意図的に作るということであれば、そもそもどういう関係の子たちが集まるのか、他の中学同士で集まるのか、どうなるのかということ。もちろん、現場でも、適当に組む、放課後わからない人同士が集まるということはある。

また、図書館の中を見ていて、グリーンコーナー、中・高生のコーナー、個別の席など、ちゃんと用意してくれていると思いつつ、ここにわざわざ中・校生が来るのかなと少し思った。

中・高生コーナーというと、学校図書室がまさに中・高生コーナーにあたる。にもかかわらず、わざわざここに来てまで中・高生コーナーに来るのかなというのはちらっと頭をよぎった。

大人の本を読みたいとか、中学生からちょっと離れた本を読みたいとかもあると思うので、中高生に特化するより、大人の一般書の本の中に、中・高生に特に読んでもらいたいという本があると、個別にしなくてもいいのかなと思った。

また、従来の図書館のイメージは、やはり静かにしなければいけない、騒いではいけない、おしゃべりしてはいけない、個人1人で勉強する場だというのがあった。

私は台東区に来てまだ3年しか経ってないが、台東区は中学生が地域へ出る場を本当にたくさん用意してくれている。今日の日曜日も7校の中学2年生が集り志を述べ、区長と話す場を設けてくれたり、中学生サミットと言って、中学生の生徒会の本部の子が3~4人に集まって、魅力ある学校をテーマに、子供たちだけで話す機会もある。そこでは、多くの大人の方達が見てる前で話す。

また以前には、環境問題について気象予報士を招いて議論するという事業に、うちの子供たちが参加してもらい、子供たちが自分の考えを述べる場面をたくさんいただいた。そこに出た子供たちが戻ってくると生き生きしてる。民間で弁論大会をやると、そこに子供たちが行って、良い賞をもらってくると朝礼で発表させたりしている。実は今、読書感想文というのはいろいろ大変で、ネットで書籍を引くとすぐに出てくるので、それを写してきたり、それを探るのが大変で、もう限界かなと少し思う。

そのため、図書館においても、図書館のフロアを使って、子供たちが意見を述べる場とか、弁論を言う場とか、本について語るとか、ビブリオバトルとか、そういう企画を考えるといいと思う。

例えば、台東区内7校の図書委員を集めたり、普段あまり目立たないけれど、本についてはしゃべれる子がいたりもする。そういう子たちの活躍する場を、図書館の1階フロアなどでやり、それを聞いて、いろいろ意見言ったりとかというのは面白そうだと思う。

【委員長】

事前に意見をいただいた委員からもご発言いただきたい。

【委員】

先ほどから話しているが、人が集まるといい、そのコンセプトに尽きる。

そのために、来てもらうためにはどうすればいいか。

例えば役に立つサービスであったり、図書委員を集めて話したらいいのではないかというのは、なるほどと思って聞いていた。

そういう方に意見やアンケートを取るとか、学習支援という観点で塾の代わりのようなことがあってもいいのではないかと思う。

今、コロナ禍のため友達同士が集まって話すことが少ない。今回新入社員で入る人たちは、ほとんど大学でそういうコミュニケーションを取っておらず新人になる。逆に3年前に入った人たちは、コロナの時に新入社員になっているので、社会人としてコミュニケーションを全く取れてないというのが現状がある。

私としてはケースバイケースで、友達同士でという場を作ってあげることが、図書館の役割としていいのではないかと思う。

また、SNSなどを使って、こんな面白いことやってるよとか、中学生が参加できるイベントなど、そういうことも含めてやっていく。

来たら楽しいという意味では、他の新しい図書館がとても綺麗だったり、工夫されたりとかいろいろあると思うので、来たら面白いよねということができたら、中・高生だけではなく、他の区民も含めていいのではないかと思う。

【委員】

大きくどういう取り組みをしていくのか、どういう居場所を作ってあげると心地いいのかということについて話したい。

取り組みについて、いい例になればと思ってシェアするが、茨城のある書店で、近隣の中学校、高校の図書委員に学校単位で、壁一面にポップを作ってもらい、「〇〇学校の図書委員です」「私たちはこんな風に普段作っています」という学校のプライドをかけて作ってもらっているコーナーがあり、毎月生き生きしている。

個々で活躍するというのもいいと思うが、社会に出るとユニットで活躍することも少ないと思うので、そういうふうな地域連携があるといいと思った。

図書館をどう居場所にするといいのか難しく感じるが、友達と積極的に話したいということも多くの意見としてあると思うので、勉強をするときに静かにしなければいけない学校図書室との差別化は必要だと思う。

とはいえ、すべての学生が、学校図書室が閉まった後に塾で集中できるかと言えばそうではないし、図書館を塾の代わりにして静かに勉強したい子もいると思うので、そういうところはゾーニングが必要かと思った。

また、行って無駄足になりたくないのに、席が空いているかとか、どのくらい混んでいるかということがリアルタイムでわかるといいと思った。

【副委員長】

先ほどの、図書委員の交流というのは、大学でもやっている。学生協働というものは、全国サミットもあり、全国の事例をお互い持ち寄ってくる。私が実行委員長をしているが、今年度から高校生も加えてみた。大学が一步進んでいるという例を参考に、中学・高校でいい活動をしている学校がたくさんあるので、それを持ち寄って、交流の場を設けると、自分たちで企画を始める。

なので、大人が提供するでももちろんいいが、子供たちが自分達で企画をして、自分達で楽しんでいくというふうにする。ピブリオバトルなどは、本当にいい題材だと思うので、中・高生、場合によっては大学生のボランティアなどを入れると、縦の関係ができる。

学習支援なども非常に重要で、勉強に来てもいいんだよ、勉強で困ったら教えてあげるよ、夏休みの宿題を一緒にやろうというときに、先輩が教えてくれる、場合によっては大学生が教えてくれるというふうにしていくと、とてもいい取り組みになると思う。学校の図書室では、なかなかできないかもしれない。大学でも、高校生を集めているところはあるが、公共でもそういう取り組みをして、これから広がっていくといいと思う。利用者協働という概念が、利用者と共に作っていく、学習支援などは非常にわかりやすいところ、かつ求められているところだと思う。二点目が、グループ学習室については長い目で見ることが必要だと思う。今の若者は家に帰って1人で勉強するより、学校に残って友達と一緒に勉強していくという文化。そういう文化で、そこに困ったら教えてくれる、お兄さんお姉さんあるいは、友達がいるというのがとてもいいかと思う。

いわゆるピアラーニングとかピアエデュケーションという概念だが、大学では主流になりつつある。ぜひそういうことも考えてみるというのではないかと思う。その時に、方法みたいなものがとても大事で、どうやれば学びやすくなるか、図書館の本をうまく使ってもらえるかということが大事になる。

浜松市は図書館を使った情報活用講座というのを3回連続でやっているが、中・高生が参加して、とても真剣にやっている。

図書館だからこういうことができる、こう学んでいくといいよと、最後には作品を作ったり、レポートを書いたりする。力をつけたい、やる気のある子供たちは、中学生でもたくさんいるので、最初の時は、そういう仕掛けをやってみると思う。

また、先ほどサイエンスカフェと言ったが、星空についての勉強会や、進路について考える会など、偉い人が来て話すよりも、お兄さんお姉さんが来て話した方が、面白いと思う。そういう企画だけ図書館で少しサポートして、あとは自分たちで、学びあっていくようになるとベストかなと思う。

また、少し外れるかもしれないが、読字障害、ディスレクシアと言って、本を読む・文章を読むのが苦手な子が一定数いる。日本は少し割合が低いですが、ヨーロッパになると1割を超えるので、大学には支援センターがある。今は、テクノロジーの力でそこをサポートしようというのがとてもたくさんあって、電子化されたテキストを聞くというのはできる。

また、読むのが苦手な子に、本の上にスマホをかざすと読んでくれるというものもある。個人だと月々500円とかで使用できる。これが一台あるだけでも、読むのは苦手でも聞くのはいいという子が一定数いるので、もちろん視覚障害の子もいるので、こういう道具があるとどんな本でも読める。世の中いろいろな道具が出てきているので、そういったものを積極的に使っていくと、隠れた読書嫌い・苦手な子も支援していけるかなと思う。

【委員長】

最後に、事前に意見をいただいたデジタルサイネージについてお願いしたい。

【委員】

私はシステムの仕事をしているので、デジタルサイネージの技術を有効活用できるのではないかと思った。

デジタルサイネージは普通に考えると広告だと思うが、実はそれだけではなくて、実際私たちが入れている家電量販店などの目的は、省力化である。

ポップやポスターを貼るだけでも、従業員がとても大変だし、印刷もたくさんしなければならぬ。

それよりは、デジタルでセンターで一括管理し配信でき、実際に現場も、サイネージにいろいろな情報を流す。

基本は、いくつかのもののある秒単位で流すだけでいいと思う。

また、量販店などに行くと、小さいタブレットのようなもので案内しているところもあるが、そういったものも使えると思う。

カウンターを見ていて私が一番思うのは、並んでる人は、席取りたい・延長したいなどで、例えば、サイネージでボタンを押せるようなものだと、そこで印刷もできる。

データ管理ができれば、学習室の予約もでき、見える化もでき、省力化もでき、人が並ぶことも減る。

そういうインタラクティブなものは、コロナ禍では触るのも嫌だという人もいるので少し微妙だが、一つのサイネージの使い方として、周知というのと、予約とかそういうものと両方使えるというところで、検討されるといいと思う。

【委員長】

まだ発言してない委員からもお願いしたい。

【委員】

図書館というのは、本を見るだけ、借りるだけというイメージだった。

それが随分変わってきて、特に中央図書館は郷土・資料調査室が非常に充実している。

調べたいものがあり、自分で行ってわかんないと案内してもらおう。

「こういうのはありますか。」と聞くと、「ここまではあります、こちらはありません。」と話がしっかり見えるので、非常に助かった記憶がある。

また、私がこれからやりたいのは、浮世絵のデータベースがあるので、江戸時代に作った浮世絵と同じ場所から写真を撮ったらどうかというのを考えている。

そういうもののお手伝いをしていただけるとありがたいと思っている。

【事務局】

皆さんからご意見をいただいて、目から鱗だなという感じで聞いていた。

特にこどもとしよしの部分については、これまで取り組んできたものから、かなり変えていく必要があると感じた。子供たちが参加して何かを作り上げていくことなど、それは中・高生も同じだと思う。

求められるサービスの提供の仕方は、これからかなり変わってくると感じた。

また、デジタルサイネージについては、今後様々な情報を流していくにあたり、紙のポスターでべたべた貼るよりは、そのような展開をして案内していくこともありだと思った。

ICT技術が進む中、これから5年、10年先を見据え、情報発信の仕方も、今回の機能強化の中でしっかり考え、できるだけことは取り入れていくことができればと感じた。

図書館は、非常に限られたスペースをいかに有効に使うかということも大きな課題であり、総合案内の部分や動線の話も含め、何度も機能強化で直せるわけではないので、ここでしっかり皆様のご意見を踏まえ、利用者にとって使いやすく、利用しやすい明るい図書館、そういうものを作っていければと思う。

【副委員長】

サイネージの話はとても大事で、図書館からの案内、例えば館内の状況、これは、WEBカメラで、ほぼタダのようなものでできる。顔を映さないぐらいの解像度の粗いものを各所につけ、それを順番に見せるだけでどこが混んでいて、どこが空いているかがすぐわかる。サイネージにそういうものを流してもいいし、館内の状況の案内もできる。本当は、予約システムなどがあるとよりよいが。

もう一つは、利用者の作品、例えばPOPや感想文など、そういったものをどんどん流すといい。特に子供の作品などはとてもいいと思う。利用者が作ったものを他の利用者に伝えていくようなツールとしても、サイネージは場所を取らないので、非常に有効で、それができるといいのではないかと思う。

先ほどの子供の場所ではないが、小学生には中学生のリーダー、中学生には高校生のリーダー、高校生には大学生のリーダーがついてやっていくと、子供会やボーイスカウト・ガールスカウトのように、サークル、クラブ活動になっていき、とてもいいと思う。図書館は今、そういう方向に行っているのだから、少し先駆けて、台東区では取り組んでいくといいのではないかと思う。

【委員長】

本日は大変豊富な意見が出たと思う。

このあと意見があれば、事務局にメールや口頭で言っただき、さらに反映させていきたいと思う。

以上で議事を終了とする。

4. 閉会

以上